

自立し未来を拓く地域企業を求めて

この本は大著で高価です。新書のように気軽に手にして読めるものではないが、何とか手に入れ読み合った方がよい。理由は以下のとおりです。

「はじめに」の部分の記述によると、著者は一九八七年に室蘭の製鉄・製鋼業の「歴史的転換」期に北海道の調査に入ったのを「皮切りに」、以後三〇年にわたり、東京に住みながら、延べ一〇〇回北海道を訪れて、各地を訪問・観察し、地元の意欲的な中小企業経営者たちとふれあい、彼らの企業経営努力を聞き取り、その集積としてこの本が出来ています。永年の努力は北海道新聞の注目を浴び、日曜版コラム「寒風温風」の執筆者として起用されていますが、いくつかの特別な協力関係以外では道庁や北海道開発局の知的集団とは離れた活動だったようです。ですから、著者はこの仕事の前に、同書末尾の広告欄だけでも五冊もの大著をもっている人であるのに、北海道に住む私たちは標記の本を見落としてしまうおそれがあります。これはいけない。さらに私には、釧路で仕事をしていた時に著者から恩義を受けたことがあって、そのお返し気持ちもあります。

著者は一橋大学に永く勤務し、現在は明星大学で研究教育に従事されている大学人ですが、この本は理論を前面に押し出しているものではなく、外見上はルポルタージュの集成を読む感もありま

す。それは読者にとって近づきやすい利点ですが、著者が具体的な実態の叙述を通して何を語りかけているのかを考えれば、事をそのように読み流して終えることはできないでしょう。流行の言葉で分析視覚を言えば、「ローカル・リソース（地域資源）」とアントレプレナーシップ（起業家精神）の結合」でしょうが、この本で大事なものは、そうしたとつてつけたような言葉で生きた人々たちの営為を偉そうに括ってしまうことを、著者が厳しく忌避しているということでしょう。

世界の政治経済が大きな構造変化を見せている時代に、具体的な地域に住む私たちがどのように

書評

『北海道／地域産業と 中小企業の未来』

関満博 著

新評論 2017年8月10日

530頁 7200円＋税

これに対応しながら暮らしていけば良いのか、日々問われ続けています。中央政府の財政により多くの資源を集中し、これを適切に配分支出することで生き抜こうとしても、それだけでは建て前どおりには事が進まず、嫌というほど次々に問題が浮上し、暴露されています。中央政府、地方府、各職業集団、地域住民、働き暮す庶民の一人一人の適切な相互関係と協力が求められていることは明らかですが、その具体像が描けてこないのです。そういう時に、著者は、とりわけ上げ潮に乗って進み、またそれにつられて引き上げられていく地域の産業ではなく、それらから見放されながら自力で生き延びていく中小経営の知恵と力を探し求めて行脚を続けてきていたのです。

釧路に八年暮らした経験のある私は、その土地にあつて考え努力した跡を思い出しましたし、本書で取り上げられている釧路の企業には注目していました。3S、すなわち、石炭、魚、製紙の三大産業が以前のように磐石ではなくなくなった時代、その三大産業に育てられ、三大産業を裾野で支えた中小企業は、そこで培われた力量を自力に変え、既成観念を打ち破った場面を目指しながら、未来を拓くべし。中央政府の知恵と金は重要だが、それにすがってはいけません。それがなくとも自力で生きる。その覚悟こそが他力を引き付けるのである。標記の著者は、そのような事例をこの北海道の中からも探し求めてくれたのです。

△評者＝荒又重雄・北海道大学名誉教授